

セイカツヤの気まぐれ美術・音楽談義（報告）

岡島利夫

先に「自己啓発クラブ」HP上のカレンダーでお知らせしたとおり、標記“セイカツヤ”氏による講演会が、7月と8月の2回に分けて、東銀座の「銀座煉瓦画廊」において開催され、右に参加したので概要下記のとおり報告をする。

1. セイカツヤ（清 勝也）氏とは

清氏とは各地での講演会等を通じ知己を得た程度であるから、取りあえず知人としておく。今回、彼の活動を取り上げた理由の一つは、自分のキャリア上得た知識と、その間に深め続けてきた趣味の知識を、定年退職後、こうして広く世に語りかけている姿に感動しているからである。高齢化社会における高齢者の活動見本となり得る存在である。

①プロフィール：静岡県富士宮市出身、28歳の時、徳間ジャパン・コミュニケーションズに入社し、すぐに東ドイツに赴任。シャルル・ブラッテン・レコード等でクラシック・レコード・プロデューサーとして約40年の長年にわたり活躍。本業の音楽に限らず、演劇、文学、絵画など、カルチャー全般に精通しており、現在も海外のオペラ、国内外の美術館に足を運んで、未だ旺盛にその知識を蓄積し続けている。

②フェルメールの名画がジャケットになっているモーツァルトのCD：モーツァルトのCDは日本でも、同じ作品でたくさんの種類が販売されている。どれが良いか迷った時、皆様は何を見て選びますか？ 指揮者や演奏者で選ぶとか、目的で選ぶ（例：リラクゼーションなど）、値段で選ぶとか、いろいろ選択の方法はありますね。そこで清氏は、ドイツ・シャルブラッテン30周年（2002年当時）企画のCDで、モーツァルト作品を画家フェルメールの絵画でパッケージする全30巻のシリーズを企画した。こう説明すると簡単に見えるが、ジャケットには一切、モーツァルトの名前も、曲の名前も一切記載されないという画期的な企画であり、発売までには紆余曲折があったそうだ。日本では徳間ジャパンコミュニケーションズ（2002/05/22）から販売されている。

2. 第一弾・気まぐれ美術談義“北方ルネッサンス及びアフリカ美術を中心に”

狭い画廊での講演会であるから定員35名としたところ、多分、40名以上は参加していたと思う。

①北方ルネッサンスとは：ネーデルランド、フランス、そしてドイツ語圏の国々において、15、16世紀に花開いた文化的動向をそう呼ぶ。しかし、それらはイタリア・ルネッサンスとは性質を異にするもので、イタリア・ルネッサン

スは古代文化の復興とそれが一つの様式として展開したが、北方諸国では、古代の受容に関しては限定的で、且つ、より個性的な表現が際立っている。彼はそれらを単純化し次のような図式で表現していた。

旧教（カトリック）＝ラテン文化＝洗練＝都会的＝美食

新教（プロテスタント）＝ゲルマン文化＝清貧＝ださい＝田舎料理

②北方ルネッサンスの画家たち：ロベール・カルバン、ロヒール・ファン・デル・ウェイデン、ヤン・ファン・エイク、ペトルス・クリストゥス、ハンス・ムメリンク……等々多くの名前を挙げていた。参加者から、“それらの中でも強いて注目すべき一人をあげるとすると”との質問に対して、上記ロヒール・ファン・ウェイデンを指摘した。

③上記との関係でその作品の一つを掲げておく。

「若い女性の肖像」

<http://www.ne.jp/asahi/art/dorian/W/Weyden/Weyden> より

Gemaldegalerie, Berlin 所蔵

（女性が髪をおおうのは、中世からの伝統である。中世からキリスト教は、女性の肉体を誘惑するもの、さらには、罪の源であるとしていた。髪はその象徴であり、覆い隠さなくてははいけなかった。）



④上記に関連し、面白い話をしていた。皆様もご存じと思うがサザビーズ（英語名:Sotheby's）という世界最古の国際競売会社がある。現在は違うが、昔、銀座ソニービルの中にその支店があった。近く日本でロヒール・ファン・デル・ウェイデンの作品の競売があることを知り（注：当時、日本には彼の作品は一点も存在していない）、その支店を訪れ、その競売の開始価格を承知したいと聞いた。すると店員は“3億円”になる見込みであると言った。そこで清氏は、“それは安い”と返した。するとその店員は、“個人でのご購入予定ですか？”と更に聞いてきたので、“そうだ”と取りあえず答えた。するとその店員は“少々お待ちください”と言って消え、すぐに支店長他何人かの幹部が現れ、特別室に案内された。そこでは紅茶やクッキーが用意されていた。右をいただきながら、ひとしきりフェイデン談義に花が咲いた。先方は清氏の知識に大いに感激したようで、念のため、こちらのゲスト・ブックにお名前と住所を書いてほしいと記帳簿を持ち出してきた。清氏は、“東京都板橋区・・・”と書き始めると、支店長ほか数名が姿を消した、その後、“高島平〇丁目・・・”と書き終わると、殆どの店員の姿はなくなった。

⑤清氏は、東ドイツ在勤中を含め、パリのルーブル美術館へは多分10回以上訪れているそうだ。その都度、モナリザを丹念に眺めている。昔は今と違って、それほど込み合うこともなく、また、カヴァーもされておらず、近くで目と目を合わせてモナリザと見つめあうことができた。しかし、不思議なことに、会うたびに、モナリザが歳をとって見えるのだそうだ。多分それは、見る側の清氏自身が歳を重ねてきているからだだろうと、自分なりに納得しているようであった。

3. アフリカ美術の魅力をめぐる話

第一回談義は北方ルネッサンス美術の話が長引き、アフリカ美術の話はだいぶ端折られることになってしまった。

①清氏が個人的に訪れたアフリカの国々：ベナン、ボツワナ、エジプト、ガーナ、リビア、マリ、モロッコ、ナイジェリア、南ア、トーゴ、ウガンダ、ブルキナファソ、ジンバブエ、ザンビア

②アフリカには全てのアートの原型ともいうべき、土俗性の恐怖とパラダイスが同居している。世界が衰えてきている現在、人類はもう一度、それらアフリカン・アートと向き合うべきではないだろうか。（ウ〜ン難しい！）

③アフリカの仮面写真



www.kankan.co.jp より

4. 談義・第二弾「バッハとドイツ古典音楽を中心に」

作曲技法上の画期的な変革をもって、今日の音楽の礎を築くと共に、それまでの教会や王侯貴族のための音楽から大衆が楽しめる音楽への発展に大きく貢献したバロック時代の二大巨匠バッハとヘンデル、そしてウィーン古典派の三大巨匠ハイドン、モーツァルト、ベートーベンの魅力と真髄に触れる。時代としては、18C〜19C 第一四半期にあたる。清氏としては上記音楽史上の定石 5 名に並ぶとも劣らぬ作曲家としてドイツのゲオルグ・フィリップ・テルマンを挙げておきたいと指摘していた。

以上